

◇展示資料 第2展示室洛中洛外図屏風（歴博甲本）とジオラマ「京都の町並 復元模型」について◇

1. 洛中洛外図屏風（歴博甲本）について

京都の景観と祭礼行事や人々の暮らしを描いた「洛中洛外図屏風」は、室町時代末期、16世紀初めから江戸時代にかけて多くの作品が作られた。「歴博甲本（旧三条家本などとも）」は国立歴史民俗博物館が所蔵する洛中洛外図屏風の一つで、現存最古の作品として知られ、1525年に室町幕府の第12代将軍足利義晴のために作られた御所（柳の御所）が描かれていることなどから、その頃の製作とみられる。ジオラマ「京都の町並」の典拠とされた絵画資料の一つであり、展示室では常時複製品を展示している。

2. ジオラマ「京都の町並 復元模型」について

洛中洛外図屏風「歴博甲本」（「16世紀前期）・洛中洛外図「上杉本」（16世紀後期）などの絵画資料を元に、戦国時代末期頃の京都の^{しもぎょう}下京の中心部である四条室町付近の町並みを想定したものである。建物、人物、置かれた物などは、その様々なあり方を表現したものであり、当時の四条室町自体を正確に復元したものではない。人物（人形）については、同じ室内に複製を展示している洛中洛外図屏風「歴博甲本」の登場人物をモデルにしており、手すりに元の絵を紹介している。



「洛中洛外図屏風、右隻（歴博甲本）」など

京都下京の四条室町付近という想定で、当時の人、モノ、町の様子をイメージしたもの



ジオラマ「京の町並」概観

2. 歴史の学習における絵画資料とジオラマ活用の留意点と有効性

ジオラマ「京の町並」は、洛中洛外図屏風などの絵画資料を元に作られたものであるが、そもそも絵画資料に描かれているものは、あくまでも絵として表現されたものであり、当時の現実そのままとは言えない。

しかし、絵画資料は当時の様子を知るための重要な史料であり、歴史学習においても、当時の風俗をイメージさせるのに有効であることから、社会科教科書（歴史分野）にも積極的に取り入れられている。そ

れを立体化したジオラマは、絵画資料よりもさらに視覚的にイメージ化しやすい。

したがって、あくまでも一つの想像であるジオラマは、「答え」ではないが、学習の導入段階において有効に活用できる。当ジオラマは、児童生徒に、戦国時代末期頃の京都の町人が暮らした町について、個々の学習課題をつかむ手立てとしてご活用いただきたい。